

ISSN 0919-1518

一九九五年三月



# 文化財學報

第十三集

井上正先生送別記念論集

奈良大学文学部文化財学科



井上正先生御近影

## 井上正先生を送る言葉

「あれで大学？」、宝来町の旧キャンパスを見に来た母親が、ゼミの学生にこう語ったそう。その言葉の通りのオンボロ校舎での悪夢のような思い出の多い中で、そこだけは陽光のさすような明るい追憶がある。

亡くなられた毛利久先生の授業を補うために、隔週土曜日の午後、しばらくの間井上先生に来ていただいていた。一日先生から電話があつて「お目にかかりたい」とおっしゃる。「来年からは参れませぬ」、先生のお話をそう予期していて、一体大切な日本彫刻史の担当をどなたにお願いしたらよいのか、私は暗然として窓の外を見ていた。授業を終えられた先生は、「来年度から来てもよい」と全く逆の意外の御返事をおっしゃった。井上先生ほどの人材は、当時も今も実在しない。その時の嬉しさは言葉にならなかった。先生は「古原さんがいるから」ともおっしゃった。私は天を仰いでひたすら先生に感謝する思いだった。

以後九年間、予期したとおり、いやそれ以上に先生はかけがえない見事な働きをされ、文化財学科の運営に大きな貢献をされてきた。

最初鏡や文様など、私の手に負えない学生の発表に臨時の応援を頼んでいたのが、学生の希望もあつて、四年ほど前から恒常的に合同のゼミの体裁を整えるようになった。二人の教官が同時に演習の指導にあたるという、例のない豪華な授業が始まったわけである。

学生にとってはもちろん幸せな時間だったのだが、実際に最も多くを学んだのは私自身である。美術史家としての理想像が、断然私の前にあり、私は本当に多くを教えられた。未知の学問の知識ももちろんだが、先生のお人柄や識見の一一は、やはり先生をお迎えて良かったという昔時の思いを何度となく反芻したのだった。

学生もよく勉強した。「井上先生に見捨てられたら、生きていけない」と誇張なしの思い入れで語った女子学生がいた。彼女が発表した当日の午後、ゼミの学生の大半が図書館の大型本、美術書のコーナーに集まっていたという。井上先生が激賞した、その

衝撃の余波で「勉強しなくちゃ」という心情が、自然の集会を促したのだと聞いた。口数の少ない目立たない学生が、良い論文を次々と書いて私たちを驚かせた。それも今では何かかえって痛ましいような思い出である。

それら学生の話をも、帰途先生の車中にするのが楽しみの一つだった。先生の批評は常に温かく公正だった。

そして年度末のゼミ旅行。自動車の両側に流れる北国の町並みの正面には、雪をかぶった黒い尾根が遠くに立ちはだかっていた。「こんな僻地にまで先生は足を運んでいたのか」という思いが、隣に坐った私の胸にいつもあった。良い勉強をしたと今でも思っている。

だが、それもなくなった。この四月から文化財学科は、この魅力にみちた、かけがえのない指導者を失うことになる。「さびしい」とか、「残念だ」とか月並みな感傷の今は湧いてこないのは、先生も私も蒼然として老いに向かうあわただしさにあるからである。

一夜思量す 十年の事

幾人か強健 幾人か無し

(唐 元稹)

複雑な感情が去来してやまない。

先生の御多幸と御健康を心から祈念する。

卒業生、在学生全部に代わって、心から祈念する。どうかいつまでもお元気で。

一九九五年三月

奈良大学教授 古原宏伸